

なぜ、モンゴル？ 〜とかち発の挑戦〜

1997年からJICA(国際協力機構)を通じてモンゴルの留学生や研修員を受け入れてきた帯広畜産大学(長澤秀行学長)。時をかけて育み、積み重ねられた人材の力と絆に支えられたビッグプロジェクトが今始まろうとしている。

同大原虫病研究センターの研究が昨春秋、地球規模の課題に取り組む科学技術振興機構の国際科学技術事業(SATREPS)に採択された。初の応募から6年かかった。

モンゴルをフィールドに、診断法が確立されておらず世界的に問題になっているトリパノソーマなど家畜の原虫の疫学調査と、診断キットの開発・実用化に取り組む研究者の派遣、研修受け入れも行う。研究費総額は5年間で約4億8000万円を見込む。プロジェクトリーダーで

同センター長の井上昇教授にモンゴルで事業を進める理由を聞いた。まず、自然環境が損なわれていないので、寄生虫が多種多様。野

同大の「武器」は、パートナーのモンゴル国立農業大学獣医学研究所の研究者

同研究所のバドガル・バトツエグ所長は99年から2007年まで帯畜大に在籍。井上教授とは同世代で、所長が大学院生の頃からの

同大では他にも武田一夫教授(地域環境学)が同国北部フブスグル湖周辺で永久凍土や森林環境、平田昌弘准教授(同)が南部ドンゴビ県などで乳加工や草地の研究に取り組む。

元留学生との信頼が強み

生動物と家畜の接触が多く、リスクが高い。「つまり(家畜の)病気の巣で、研究者にとっては材料の宝庫。ラボから広い草原に出て、研究のアイデアを見つけてほしい」と語る。

モンゴル側のリーダーで00頭の馬がいても、持ち主が個体を識別し、状態をよく把握していること。

ことで、原虫病のサーベイランス(感染症の調査・監視)の仕組みを立ち上げる。現地で驚いたのは「10

満を持して 帯畜大研究プロジェクト



澤学長とバトツエグ所長、井上教授(前列右から3人目より)ら帯畜大とモンゴル国立農業大学の関係者(1月、同農大で)

付き合い。「モンゴル人は激しくやりあっても後に引かない」(井上教授)。同機構関係者も感心するほど連携がスムーズという。まずは、今夏から広大なモンゴルの全県に入り、原虫病の分布地図づくりに着手。各村の獣医の協力を得ながら家畜の血液サンプルを集め、データを更新する

がもてなす「お接待」に通ずることも感じている。同大では他にも武田一夫教授(地域環境学)が同国北部フブスグル湖周辺で永久凍土や森林環境、平田昌弘准教授(同)が南部ドンゴビ県などで乳加工や草地の研究に取り組む。中野昌明・同大企画国際室長は「大学として最も深い交流をしている国」とい



「MEMO」道によると、現在道内で学ぶモンゴル人留学生は29人(13年5月現在)。人口1万人当たりおよそ4人が日本留学した計算になり、世界で最も高

い、新たにモンゴル文化教育大学と連携し、乗馬を通じた青少年交流も計画中だ。(フリーランスライター 小林志歩)